

# ペカンの繁殖に関する研究 第1報

大崎 守\*・松尾 平\*・飯田 実\*

ÔSAKI, M., MATUO, T. and IIDA, M.  
Studies on the Propagation of Pecans. (1)

暖地におけるペカンの栽培は、寒地のクルミ栽培とともに我国の山野開発上誠に有望と思われるが、苗木養成における栄養繁殖の困難さが、増殖上の大きな支障となつている。従つてその繁殖法を確立するため、1953年以來各種試験を行つてきたので、その中主なるものについてここに報告する。

\*九州農業試験場

## 1. 切接に関する試験

イ. 露地における接木 接木に対する従来の考え方は砧木の発育をできるだけ進めておき、これに反し穂木の方はなるべく遅らすという方法である。本試験でも穂木を冷蔵しておき、接木時期もいろいろに変え、又砧木に地下部を用いたり、緊縛材料として稲藁とビニールを比較したりして毎年切接を繰返したが、その活着率は極めて僅少で成功しなかつた。

第1表 切接時期試験成績

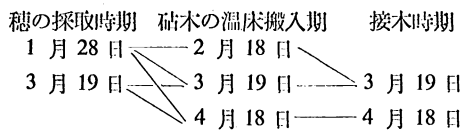
接木時期	品 種	接木本数	活着本数	活着率%	時期別 活着率%	備 考
4月22日	Schley	9	0	0	10.0	1. 穂は2月中旬採取し穴蔵に貯蔵した。 2. 砧木は実生3年生。 3. 接木部の緊縛物はワラ。 4. 調査日は8月30日。
	Curtis	15	1	6.6		
	Success	16	3	18.8		
4月28日	Schley	4	2	50.0	20.0	
	Curtis	14	2	14.3		
	Curtis?	4	1	25.0		
	Success	13	2	15.4		
5月12日	Schley	13	0	0	1.9	
	Curtis	21	0	0		
	Success	20	1	5		

第2表 緊縛材料を異にした切接試験成績

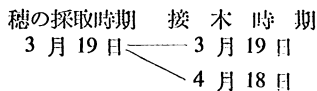
接木部位	緊縛材料	接木本数	活着本数	活着率%	備 考
地上	ワラ	50	2	4	1. 穂はCurtis種, 3月24日採取し, 冷蔵したるもの。 2. 砧は3年生実生苗 3. 接木部位の「地下」とあるは根部である。 4. 調査日は5月17日
地下	"	50	6	12	
地上	ビニール	50	3	6	
地下	"	50	1	2	

ロ. 温床における接木 露地における切接が成績不良である原因として、接木時期の地温不足と、地温の激変があると考え、高馬氏のクルミにおける試験に倣い電熱温床を採用することにして実験した結果、大成を収めた。設計及び成績は次の通りである。

設計 組合せ 温床接の場合



露地接の場合



- 備考 1. 穂は採取後1°C前後に貯蔵した。  
2. 砧木は野生種実生4年生である。  
3. 温床温度は接木部位を略25°Cに保った。

成績

第3表 温床利用切接活着率 (3月19日接木)

穂の採取時期別					品 種 別			穂の部位別								
穂の採取時期	砧木搬入時期	接木本数	活着本数	活着率%	品 種	接木本数	活着本数	活着率%	穂の部位別	接木本数	活着本数	活着率%				
1月28日	2月18日	30	28	93	Curtis	40	34	85	基	34	34	100				
	3. 19	30	27	90	Schley	42	40	95								
3月19日	2月18日	30	25	93	Maney maker	18	15	83	中	37	37	100				
					3. 19	30	27	90					Success	20	18	90
	3. 19	30	27	90	Success	20	18	90					先	49	36	74

前述のように従来の方法による切接の活着率は、極めて悪かつたが(10~20%)、温床接による本試験の結果は、極めて好成績であつた。第1回に比べて第2回目の成績がやや不良であるのは、この時期の外気温が第1回目の時期より高く、そのため砧木の発育に比較してなるべく抑制したい穂の発育が促されたためではないかと思われる。

穂の部位別の活着率の差は、期床、露地を通じて極めて明確で、必ず充実した部位のものを使うことが大切であることがわかる。

その他の条件即ち温床への砧木搬入時期、穂の採取時期、品種間の差等については本試験の範囲では明らかでなかつた。

次に過去数回の試験に比較して、本試験の露地切接の活着が良好であつたのは意外であり、その理由については不明であるが、今後あらゆる角度から究明すべき問題である。

第4表 温床利用切接活着率 (4月18日接木)

穂の採取時期別					品 種 別				穂の部位別			
穂の採取時期	砧木搬入時期	接木本数	活着本数	活着率%	品 種	接木本数	活着本数	活着率%	穂の部位別	接木本数	活着本数	活着率%
1月28日	4月18日	30	15	50	Success	14	8	57	基	18	15	83
					Maney maker	10	7	70				
3月19日	4. 18	30	21	70	Curtis	14	8	57	中	22	16	73
					Schley	10	7	70				
					Stuart	12	6	50				
									先	20	5	25

第5表 露地に於ける切接活着率 (4月18日)

接木時期	接木本数	活着本数	活着率%	穂の部位別	接木本数	活着本数	活着率%	備 考
3月19日	30	19	63	基	7	7	100	1. 品種は Curtis 2. 穂は3月中旬採 3. 砧 実生3年, 2月下移植
5月27日	30	20	67	中	12	10	83	
				先	11	3	21	

2. 芽接に関する試験 芽接が切接に比べて比較的よく活着することは、従来から知られていたが、当部

の成績でもそうであつた。なお時期としては9月10日頃がよいと思われる。成績は次の通りである。

第6表 芽接時期試験成績

接木時期	接木部位	接木本数	活着本数	活着率%	備 考
9月9日	地上	15	15	100	1. 砧木は野生実生4年生 2. 剥皮は第1回は容易であつたが、第2、第3回になるに従い困難となつた。 3. 品種は Curtis 4. 方法としてはハメ芽接を用いた。
	地下	10	2	20	
9月19日	地上	14	13	93	
	地下	10	1	10	
9月29日	地上	10	7	70	
	地下	8	0	0	

3. 秋接に関する試験 10月21日に、生育中の砧木と穂木を用い腹接を行い緊縛材料としてワラ、ビニール、又覆土と無覆土とを比較したが、何れも全く活着しなかつた。

でなかつたのでこの程度であつたが、入念に行えばなお一層好結果を得ることは間違いないと考えられる。この方法で得た苗は2年後には十分砧木として用い得る。

4. 挿木に関する試験 イ. 根挿 別表の通りで室外好成績であつた。本試験では挿木後の管理が十分

ロ. 枝挿 根挿同様実生個体を用いて行つたが、殆んど発根しなかつた。

第7表 根挿の発根状態

根の直径	根挿本数(A)	発根の多少				$\frac{B+C+D}{A} \times 100$	備 考
		多(B)	中(C)	少(D)	無		
大(2cm以上)	96	16	14	16	50	48.0	1. 挿木時期は2月下旬。 2. 実生の根を用いた。 3. 挿穂は25cmに切斷。
中(1~2cm)	245	33	29	55	128	47.7	
小(1cm以下)	80	2	6	18	54	32.5	

第8表 根量と枝梢との関係

根量	根長 最大平均	根重平均	枝梢長平均	枝梢重平均
多	48.3cm	29.8gm	41.6cm	8.1gm
中	40.2	4.8	22.0	1.6
少	28.8	0.9	16.8	1.3
無	0.0	0.0	14.0	1gm 未満

第9表 枝挿の発根状態

枝の直径	枝挿本数 (A)	発根の多少				$\frac{B+C+D}{A} \times 100$	備考
		多(B)	中(C)	少(D)	無		
大(2cm以上)	25	1	0	0	24	4.0	1. 挿木時期は2月下旬 2. 穂は30cmに切断 3. 根量の多少は根挿に準ず。
中(1~2cm)	135	7	1	2	125	7.4	
小(1cm以下)	97	1	1	0	95	2.1	

5. 自根樹作成に関する試験 前に述べたように、実生の場合は根挿が容易であるが、これと同様に品種物の場合も発根が好成績を得るものとすれば、接木によらず根挿により容易に苗木を得られることになる。然しそのためには先ず母樹となるべき品種物の自根樹

を作成する必要があるわけで、このため数年前より黄化圧条、ウバツギ、接木苗の剥皮土寄、針金等による緊縛土寄等各種の処理を行つてみたが、現在まで全く発根をみなかつた。今後黄化処理の研究、各種ホルモン剤の利用等自根樹作成に努力する予定である。